

東奥日報

2021年(令和3年)6月19(土曜日) (16)

八戸

八戸市の八戸工業大学感性デザイン学部は18日から、八戸小唄流し踊りの実技講習を始めた。地域文化論の授業の一環で、講師は日本舞踊泉流師範の泉彩菜さん。1～4年生約50人が週1回のペースで練習し、7月9日に学内で発表会を開く。

泉さんは、八戸の名を全国にPRするために1931年に八戸小唄が作られ、市民に広く踊ってもらおうと40年後に流し踊りが行われるようになった歴史を紹介。実技では「カモメが羽を広げて大空を飛んでいくように」「波がザブン、ザブンのイメージで」などと学生たちに説明し、優雅な動きになるよう繰り返し練習した。

小野智也さん(創生デザイン学科2年)は「一つ一つの動作に意味があることが分かった。難しいけれどしっかり覚えたい」、窪田悠平さん(同)は「ゆっくりとした動きの中で姿勢を



地域文化論の授業で八戸小唄流し踊りを練習する学生たち

小唄流し踊り優雅に

八工大、発表会へ練習

維持するのは大変。みんなでうまく踊れたら楽しいと思う」と語った。

泉さんは「八戸小唄の歴史や歌詞の素晴らしさ、先人たちが継承してきた努力を伝えたい。若い人たちに受け継がれてほしい」と話していた。

地域文化論は、八戸地域の歴史や文化、伝統工芸などをさまざまな角度から学ぶ。八戸小唄流し踊りは前年度から取り入れた。(近藤弘樹)

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」